

## 禅の存在論

上田閑照説

薔薇、おお！ 純粹な矛盾、  
幾重にも重ねた臉の下  
誰のでもない眠りである楽。

(ドイツの詩人リルケの墓碑銘)

ところで、でき上がった詩としてではなく、このような詩句が生れてくる「言葉の出来事」として見る場合、……「おお！・」を詩句の全体が発せられてくる源—根源語—と見る、逆にいえば全詩句をこの「おお！・」の分節と見るができると思う。…薔薇の現前にあつて自己を忘れて「おお！・」と言う時、その「おお！」の直下においては薔薇も忘れられている。すなわちその「おお！・」に現前しているものはもはや旧套の薔薇ではない。われわれが通常薔薇と呼んではすませているそのものが、名づけ得ざるもの、言い得ざるものとなって現前しているのである。その驚きなのであって、単に薔薇に対する驚きなのではない。

「おお！」について、「薔薇と呼んではすませたそのものが突然名づけ得ず言い得ざるものとなることによって、そこが裂目になって言葉の世界が破れるその音響である。

公案として方法的に使われた禅的言表は無意味性に全てをかける。公案は全く無意味(と見える)言表の無意味性を著しく強調し、これを人間意識につきつけることによって、日常的意識をその極限に追いつめ、遂にはその自然的外殻をうち破らせようとする手段である。

無字の公案の場合、絶対無限定者としての存在が、自己の限定相である「無」を無化する。そこに本源的な「無」、すなわち存在の絶対無限定性が露呈されるのである。

井筒俊彦説

「禅はその活動のあらゆる場において、無意味性という現象を重視する」

公案として方法的に使われた禅的言表は無意味性に全てをかける。公案は全く無意味(と見える)言表の無意味性を著しく強調し、これを人間意識につきつけることによって、日常的意識をその極限に追いつめ、遂にはその自然的外殻をうち破らせようとする手段である。

無字の公案の場合、絶対無限定者としての存在が、自己の限定相である「無」を無化する。そこに本源的な「無」、すなわち存在の絶対無限定性が露呈されるのである。